

二つの農業経営学

磯辺秀俊著『農業経営』
岩片磯雄著『農業経営学』

渡 辺 兵 力

一 戦後、農業経営問題の実践的要請がたかまつたためか、経営研究がその数において隆盛を極めてきた。と同時に、戦前には稀であつた農業経営学として体系的なかたちをとつてゐる著述も、既に十指に近く出された。個別的、実証的研究分野において、その研究方法に一種の行詰りが感じられる斯学にとつて、研究方法乃至は問題意識に対する態度を伺ひ知ることができる体系的著述のいくつかを得られたことは喜ばしい。

この種の体系的著書の方法論或は経営理論を各方面から検討する必要があるが、ここでは類書の中で、いろいろな意味で異色をもつ東大磯辺教授と九大岩片教授との近著をとりあげ、評者の私的な見解を若干述べてみたい。

この二著を扱つた主たる理由は、

(1) 両者ともその著作動機が必ずしも高度の経営理論を前面に打

出す意図からでなく、むしろ、日本の農家の「経営合理化」という具体的問題を考へていく上に役立つ「考へ方」の展開、すなわち、いわゆる農業経営問題群をある観点から整理して、主として実践活動にたずさわる人達を讀者として予想して書かれてゐる。したがつて、農業経営学の教科書的なかたちの体系化を目指してはいない。にも拘らず、二人の著者の経済学体系に対する根本的態度が異なるために、問題意識やその扱い方がかなりちがつてゐる。評者自身としては、両者の立場をそれぞれ理解できるが、いざ、その何れかの行き方に自分の立場を限定しようとする、依然として判然としないものをもつてゐる。その意味で両者のもつ問題は評者にとつてもまた問題である。

何れども、両者とも他の農業経営書と異り、農業経営における技術問題を重要視し、経営経済問題とともに技術問題を意識的に扱つてゐる点は共通しており、評者もまたこれと全く同じ考え方に立つてゐる。独乙流経営経済理論、日本的農家経済簿記、そしていわゆる経営実態調査、という三つの研究分野が併行的に存続してきた感のある、従来の斯学の流れからは、今日の実践的課題、すなわち個別経営の合理化或は経営普及という問題に具体的に或は直接、答えられるものが少いのではないか。また、文字通り実学として農業経営学を考へるならば、当然生産技術を抽象することはできないであらう。

以上の二点、すなわち、両者の根底に流れている「対立性と共通性」とが、評者が両教授の著書に関心を払う積極的理由である。

二 磯辺教授は、「本書は、研究者の立場で冷やかに事実を解釈するというよりも、農家の立場に立つてその実情に応じ農業経営を如何に改善するかを考えるのに役立つような経営的考え方、そのための基礎知識を述べることに重点をおいた」と述べ、更に、「いままで経営経済論と技術指導が互に遊離したところに、農家の経営実践に必ずしも有効に役だたなかつた」という問題を感じ、農業経営についての基本的態度を、「農業経営を経済と技術の相互交渉する場として、また私経済と国民経済の交渉する場として理解する」(「はしがき」より)、という点におかれている。

この著書に対する、また農業経営についての磯辺教授の根本的態度は、岩片教授の場合にも殆どそのままではまると理解してよいであろう。すなわち、岩片教授はその「はしがき」に、「零細な農業によつて生活を支え、その向上に志し乍ら、しかも現実には厚い壁につき当っている多くの農家の寡黙な求めに、誠実に答えたのである。それだけにこうした生活の在り方を、ただ説明又は解釈するのではない、現状の改善乃至は合理化の道を体系的に考えていきたいのである」と著書 の 目的を述べ、更に別のところに、「農業経営が具体的に立脚する技術的基礎を抽象してし

まつて、所謂『農業経営学』として体系化することも、その実学的在り方を考えれば決して妥当な方法ではないであろう。農業経営学はもともと、合理化のための実学として発達したのであるから、そのために、どのような農業技術の体系をとるべきかの問題は斯学の重要な一部をなしていた。」という見解を展開されている。

このように、両教授の農業経営についての理解の仕方及び経営研究での問題意識にはかなり共通したものがあることが認められよう。にも拘らず、両著の内容はかなりかけはなれている。

三 磯辺教授の『農業経営』は十章からなる。第一、二章は本書の序論に当る。第一章で著者の理解される農業経営及び経営問題を述べ、ついで第二章で日本の農業経営の特色を、環境と動向の面で概述してある。第三章(経営改善の緊要性)、第四章(経営改善の方向)、第五章(経営改善と技術改善)、第四章(経営問題と農業技術問題との経営的結びつきを扱ったところで、本書が他の類書と異なる点の一つである。とくに、第五章(第一節、技術発展の方向。第二節、技術改善と経営改善)において、著者の農業技術に対する考え方と技術と経済との関係についての見解が、明らかにされている。評者もまたはば本書と同様の理解をもっているが、農業技術についての根本的な理解の仕方 の 点で、岩片教授のそれとやや相異するところである。第六章は本書の中心

的部分に相当する。すなわち、「経営の組立て」という標題で、「生産費とその引下げ」(第一節)、「作物家畜の比較有利性」(第二節)、「作物家畜の組合せ」(第三節)、「経営組織の組立て」(第四節)等の問題が述べられている。この章によつて磯辺教授は、農業経営改善乃至は合理化問題を経営組織論と費用論との結びつきによつて説明していく方法をとつておられる。

教授の考えられている日本農業合理化の基本方向は、個別作目の生産費の引下げを伴いつつ経営を集約化して行くことであり、そのための経営組織の問題が、かなり沢山の具体例を通して述べられている。正統派派農業経営学の部門別を基準にすれば、本書は、いわゆる「経営組織論」を中心とした構成をとつていているといえよう。従来の経営研究とくに実態調査研究でも、経営組織の問題にしたものがないわけではないが、ともすれば単なる組織の靜態的記述或は機械的比較論が多く、経営内における各生産部門間の結びつきの問題や、それと費用との関連を扱つたものが少なかつた。勿論本書はそれ等の事例的、実証的研究ではないが、今後の実証的研究の方法について教えるところが少くないであらう。また、経営実践に關与する人々については、いわゆる「經營的考え方」の理解に役立つところである。

第七、八、九章は、今日の農業経営改善問題の中で一番各地で関心が払われている、有畜化論と機械化論並びに経営改善の具体

的方法としての経営計画論が述べてある。耕種偏重無畜農業といわれるわが國の農業の有畜化は、一般論として極めて重要な課題であるが、有畜農業の經營的構造を体系的に扱つたものは、岩片教授の『有畜經營論』をのぞいて見るべきものがなかつた。その点、本書第七章は、いわゆる有畜農業の個別經營的理解に役立つ。経営における家畜飼養を、(i)労働節約的養畜、(ii)土地生産増加的養畜、(iii)土地生産高級化的養畜、(iv)加工業的養畜、の四つの類型に分けた理解の如きは本書が最初であらう。農業機械化の意義についても著者はかなり広い且つ弾力性のある見解をとつてゐる。また、畜力、機械動力等経営手段の經濟性計算の方式を出されたことは、経営實踐者の經濟的知識の具体化に寄与するところが大い。

第十章(むすび)では本書で扱わなかつた問題が並べてあるが、却つてここに著者の経営問題について問題意識が示されている。経営をめぐる制度的条件、土地改良其他の資本投用の問題、いわゆる共同化問題、更に農業經濟問題等が省略されたが、個別經營の「粹」として、これ等の問題の重要性は認識されている。勿論、本書は著者も断つてゐるように農業經營学術書ではない。常に、實際の合理化問題を背後に意識して、努めて具体的に平易に述べられている。しかし、それ故に却つて著者の經營学的立場をはつきりと知ることができるともいえよう。

四 岩片教授の『農業経営学』は表題に伺えるように、前著よりはるかに学術書形式と内容をもっている。その意味でより教科書的である。全九章に分けられ、その構成は従来のいわゆる農業経営書(例、橋本伝左衛門著『農業経営学』)とかなり趣きを異にしている。参考のため章別の目次をかかざると、

- 第一章 農業経営研究の課題
- 第二章 農業生産力の荷い手としての農業経営
- 第三章 農業経営に於ける労働の技術的性格
- 第四章 農業労働の社会的性格
- 第五章 農業経営の合理化と労働手段の高度化
- 第六章 農業経営に於ける労働対象の意義
- 第七章 経営の基本条件としての農地
- 第八章 作付方式と経営方式
- 第九章 農業経営の合理化のための経営組織

の通りである。これを一見しても想像できるように、本書は、常識化された農業経営問題の扱い方とかなり異つてゐる、といえよう。二、三の特色をあげるならば、

- (i) 全体として「経営要素論」に重点がおかれている。この点岩片教授の以前の労作「農業経営の基本問題」(『農学講座』第一巻所載)、および『養畜経営論』が、主として組織論に重点がおかれていたのと対照的である。

(ii) 「経営要素論」としても、そこで扱われている問題の扱い方が、著者の理解されている「技術論」の農業生産への適応という感が深い。すなわち、本書の一つの中心が第三―五章におかれてゐるように思われるが、ここでの態度は、「日本農業の経営合理化の方向と方法とは労働手段体系の高度化にある」と、表現できるような見解が強く貫かれてゐる。

(iii) 次に、本書の底を流れる、著者の経済学的立場から、当然導かれることではあるが、経営問題、就中その合理化問題を個別経営を抽出した「場」で扱うのではなく、個別経営の社会的・制度的環境において理解していく、という点が各所に見られる。

以上あげた三点は岩片教授が磯辺教授の場合と見解を異にする点であり、したがつて、問題意識も自から相異する。

本書は、著者の見解がはつきりと前面に出されたもので、その意味において異色ある著書である。そして、労働価値説体系の立場からの、農業生産問題への最初の具体的接近の成果として、注目すべきものといえよう。

五 二つの著書を手にして、評者は新しい農業経営問題の理解が、この両書ではじめてまとめられたという感をもつ。その意味で両書の役割は大きいけれどもそれはまた新しい経営研究の立場の分岐点でもあるようだ。磯辺教授の見解は、農業経営研究或は

経営問題の中心課題はあくまで私経済の内部構造にあるということになる。これに対して岩片教授は、経営研究でも、むしろ社会的農業生産というかたちで扱うべきだ、という見解にたたれている。更に、同じく「技術と経済」を問題にする場合も、前者はあくまで広く農業生産技術と個別経営の経済との問題を扱っているが、後者は技術と社会経済との関連を背後に意識して技術そのもの（労力と労働手段）を説く、という考え方に立ち、両者は対立している。

評者は農業経営の突発的課題に直接結びつく問題領域としては磯辺教授のとられる問題意識に全面的に同調する。岩片教授は著書のはじめに本書の意図を述べておられるが、本書のもつ役割を経営実践に関係の深い人々の直接的参考にと期待することはできないように思える。

問題を『経営研究』に限定した場合は、経営研究の問題領域として、岩片教授の提出されている問題を軽視できない。しかし、それが農業経営学の中心課題であるとは考えられない。端的に言えば、岩片教授の『農業経営学』を手にして「これが農業経営学なのか？」という疑問をもたざるを得ない。農業生産の技術構造的な特色と、その歴史的展開、その中における日本農業の位置及び日本農業の欠陥、といった問題について、本書に教えられるところは非常に多いが、農業経済学、農業生産諸学と区別されるとこ

ろの農業経営学の中心問題が本書のような問題領域と扱い方に限定されるものとすれば、種々批判ができることであろう。それに対して磯辺教授の著書はその意図も内容も「経営学」でなく経営問題の所在というところにあるので、ただちに批判の対象にはできないが、評者の私見は、教授の見解の方に近い。しかし、仮りに本書の問題だけが農業経営学の領域かと問われれば、肯定するわけにはいかない。明確な表現ではないが、両者の問題を結びつけるところに、我々の課題があるように思える。その意味で、若

し、両者の方向を「二つの経営学」と一応表現するならば、この二つを一つにするところに、今後の経営学の進路があろう。今後期待される日本の農業経営学並びに農業経営の研究は個別経営の動態的変動機構の理論的、具体的究明のように思える。磯辺教授は経営合理化計画的経営変動の諸方策を論じておられ、岩片教授もまた日本の農業生産の近代化を課題にされているのであるから、問題それ自体は動態的性格のものである。しかし、実際に扱われているのは、技術的問題であり、それが経済的といつても、一方は経営における部分の問題に限定され、他方は経営というよりあまりにも農業（社会経済）的である。一定の組織を通じて相互に関連をとった、ミクロ的経済世界の体系的経済的扱い方とはいえない。経済単位としての経営体が何等かの変動要因を得て、発展的に或は波及的に、その内部構造を変えつつ拡大して行

く過程に対する理論の実証こそ、はじめて経営学的な問題取扱いだと期待されるが、そのような要求からみれば、両者はまだ答えているところが少いようだ。

しかし、個別経営の内部機構の動態過程を対象とする場合であっても、それが日本農業の現状を前提とし、真に実際の問題を扱おうとするならば、当然その経営を囲む社会・経済的環境を問題としなければならない。その意味で岩片教授のとられる方法と問題意識とはやはり捨て去ることができないであろう。